

昔むかし、あるところに、父親と母親がいました。ふたりには、娘がひとりありました。やがて、母親がなくなると、父親は新しい妻をむかえました。この新しい母親は、とてもいじわるな人でした。娘をひどくきらって、なんとかして追いだしてやろうと考へました。

あるとき、父親がよそへ出かけているあいだに、母親は娘にいました。

「わたしの姉さんのところに行つて、針と糸を借りておいで。おまえのシャツをぬつてやるから」

その姉さんというのは、骨の足のババヤガーでした。

娘はほかではなかったので、さきに、自分のおばさんのうちに寄りました。

「こんにちは。おばさん」

「まあ、いらつしやい。何か用かい」

「ええ、かあさんにいわれたの。ババヤガーのところに行つて、針と糸を借りてくるように。私のシャツをぬつてくれるらだつて」

すると、おばさんは、娘に、どうすればいいか教えてくれました。

「かわいい姪っ子や。向こうに着いたら、シラカバの木がおまえの目をたたこうとするから、枝にリボンをむすんでやるんだよ。それから、門がギーギーきしんでおまえをたたこうとするから、ちようつがい油をさしてやるんだ。犬たちがかみつこうとしたら、パンを投げてやつて、ねこが目をひつかこうとしたら、ハムを投げてやるんだよ」

娘は、ババヤガーの家に向かいました。森の中をどこまでもどこまでも歩いていくと、小屋があつて、中で、骨の足のババヤガーが、機織りをしていました。

「こんにちは。おばさん」

「やあ、よくきたね」と、ババヤガーはいました。

「かあさんが、おばさんに針と糸を借りてくるように。私にシャツをぬつてくれるの」

「そうかい。じゃあ、ちよつとすわつて機織りをしておくれ」

ババヤガーは、娘を機の前にすわらせると、外へ出て、お手伝いにいました。

「ふろをたいて、あの娘をよく洗うんだ。朝ごはんに食べるんだからね」

娘はこわくて生きた心地がしませんでした。そこで、お手伝いに、こっそりハンカチをやっていたいました。

「ねえ、おふろのまきに火をつけてはいけないわ。まきには水をかけるの。水はふるいでくんでくるのよ」

ババヤガーは、ぶらぶら待っていました。しばらくすると、まどから声をかけました。

「娘や、機を織っているかい。かわいい娘や」

「ええ、織ってるわ、おばさん」

すると、ババヤガーは行ってしまいました。娘はねこにハムをやって、

「ここからにげだすにはどうしたらいいかしら」とたずねました。

ねこはいいました。

「あんたにタオルとくしをあげるよ。これを持ってにげるんだ。ババヤガーが追いかけてくるから、あんたは地面に耳をつけ、ババヤガーがそばまで来たのがわかったら、タオルを投げるんだ。そしたらタオルは大きな川になる。もしババヤガーが川をわたって追いかけてきたら、また地面に耳をつけ、そばまできたのがわかったら、こんどはくしを投げるんだ。そしたら深い森になる。ババヤガーはぜったい通りぬけられないよ」

娘は、タオルとくしを受けとってにげだしました。すると、犬たちがかみつこうとしました。娘がパンを投げてやると、犬たちはだまって通してくれました。そのとき、門がギーギーきしんでボタンとしまりかけました。娘がちょうつがいちょうつがいに油をさしてやると、門もだまって通してくれました。ところがそのとき、シラカバの木が娘の目をたたこうとしました。娘がリボンをむすんでやると、シラカバの木も娘を通してくれました。

ねこは、機の前にすわって機織りをはじめましたが、すぐに糸がからまってしまいました。ババヤガーがまどから声をかけました。

「娘や、機を織っているかい。かわいい娘や」

「ああ、織ってるよ、年寄りの魔女めまじよ」と、ねこがいらいらして答えましたこた。

ババヤガーは小屋にとびこんできました。そして、娘がいなくなっているのを見ると、ねこを追っかけてぶち、

「どうしてあの子の目をひっかなかったんだ」としっかりつけました。ねこは、

「おれは長いことあんたに仕えてきたけど、あんたは骨一本くれなかったじゃないか。

でもあの子はおれにハムをくれたのさ」といいました。

ババヤガーは、犬たちと門とシラカバの木とお手伝いを、つぎつぎつかまえてしかりつけ、ぶちました。犬たちはいいました。

「おれたちは長いことあんたに仕えてきたけど、あんたはこげたパンの耳ひとつくれないか。でもあの子はパンを丸ごとくれたのさ」

門はいいました。

「おれは長いことあんたに仕えてきたけど、あんたはちょうつがい（ちょうつがい）に水さえさしてくれなかったじゃないか。でもあの子は油をさしてくれたのさ」

シラカバの木はいいました。

「私は長いことあんたに仕えてきたけど、あんたは糸さえむすんでくれなかったじゃないか。でもあの子はリボン（リボン）をむすんでくれたのさ」

お手伝いはいいました。

「私は長いことあんたに仕えてきたけど、あんたはぼろきれ一枚（いぢまい）くれなかったじゃないか。でもあの子はハンカチをくれたのさ」

骨の足のババヤガーは、臼（うす）にとびのり、きねでこぎ、ほうきで後をはきながら、娘のあとを追いかけてきました。

娘は、地面に耳をつけ、ババヤガーがそばまで来たのが分かると、タオルを投げました。たちまち大きな川があらわれました。ババヤガーは、川まで来ると歯ぎしりして怒りくるい、小屋にとつてかえしました。そして、雄牛（おうれ）たちをつれて川までやってきました。雄牛たちは川の水をすっかり飲みほしてしまいました。

ババヤガーは、また追いかけてきました。

娘は、地面に耳をつけ、ババヤガーがそばまで来たのが分かると、くしを投げました。たちまち深くおいしげった大きな森があらわれました。ババヤガーは、森をむしやむしや食べはじめましたが、どうしても通りぬけることができせん。とうとうあきらめて、引きかえしていきました。

さて、父親は、家に帰ってきて、妻に、娘はどこへ行ったのかとききました。

「わたしの姉さんのとこだよ」と、妻は答えました。

そこへ、娘が走って帰ってきました。父親が、

「どこへ行ってたんだ」とたずねると、娘はいいました。

「ああ、とうさん。あのね。母さんが、私をババヤガーのところへやったの。私のシャツを作るから針と糸を借りてくるように。そしたら、ババヤガーが私を食べようとしたの」

「おまえ、どうやってにげてきたんだ」

娘がこれまでのことをすっかり話すと、父親はかんかんはらに腹を立て、妻をやっつけてしまいました。

それからは、娘は父親とふたりで幸せにくらしました。

わたしもそこにいて、蜜みつのお酒をよばれたんだけど、ひげをつたって流れてしまって口には入らなかったんだよ。

村上郁再話

資料 『Russian Folktales from the Collection of A. Afanasyev』 Sergey Levchin